

ASEANとの交流促進と今後の発展の可能性

アンコールの国カンボジアを訪れて考えたこと

鈴木勝比古（日本 AALA 常任理事）

1 一気品に満ち、華麗な「天女の舞（アプサラ・ダンス）」はカンボジア王朝舞踊の華であり、何時観てもうっとりとするほど魅了されます。今回のカンボジアの旅でシエムリアップのディナーショーとして上演されたアプサラの舞も見事な出来栄でした。



（ディナーショーのアプサラの舞）

ショーの終わりでは野本団長が壇上の天女の列に割り込んで幸福そうな笑顔を見せていました。アプサラの舞は、カンボジアの伝統芸能の粹（すい）であり、カンボジア国民の誇りでもあります。同時にアジア各地、世界各地から訪れる人々を恍惚の世界へといざなう絶品の芸術です。

ポル・ポト政権のジェノサイドから蘇り「ゼロからの出発」をしたヘン・サムリン国家主席・フン・セン首相の人民共和政権樹立からカンボジアは40余年を経ました。パリ国際協定を締結し、内戦に終止符を打ち、国連監視の総選挙の実施からでも約30年近くが過ぎました。総選挙後の新憲法でカンボジアは再び「カンボジア王国」となりました。これは国の平和と統一を願うカンボジア国民の意思の表れであったと思います。

共和制から王制への転換、民族の和解・和合への前進と政治体制は曲折を経ましたが、

1999年にはASEAN加盟を実現しました。21世紀に入って初めの10年間は10%台の成長、その後もコロナ禍に見舞われるまで約7%台の成長を遂げ、不死鳥のごとく成長を遂げたカンボジアを目の当たりにして大きな感動を覚えました。

2－カンボジアのASEAN議長国就任は今回が3回目でした。2002年の1回目ではASEAN・中国の南シナ海での平和的行動の原則を取り決めた「南シナ海行動宣言」を締結しました。現在はこの「行動宣言」を基礎にしてASEAN・中国間で法的拘束力を持つ「行動規範」の作成の話し合いが続いています。2回目の議長をつとめた2012年には米国・ロシア両国が東アジア首脳会議に初参加しました。米露両国の参加を機に東アジア首脳会議は本格的にインド洋・太平洋を含めた広大な平和地帯づくりに乗りだしました。今回の3回目の議長国の任務もきわめて重大でした。ロシアのウクライナ侵攻、ミャンマー軍事政権の国民に対する武力弾圧、コロナ禍、気候変動、その中での東アジアの平和地帯づくりと重大な課題が山積しています。カンボジアはロシア軍のウクライナ侵攻に対し明確な反対の意思を表明しました。

エピソード2－カンボジアが国連総会でロシアの侵略非難決議に賛成し決議案提出国となった理由を述べるフン・セン首相(カンボジアは3回にわたり賛成投票)

「侵略に対する中立はない」と語るフン・セン首相(3月28日)



3月28日付プノンペン・ポスト(電子版から)

- ・ 侵略は認めない。カンボジアはこの問題で中立ではない。
- ・ カンボジアの外交は法と国連憲章の原則に基づいており、国際紛争では武力の使用も、脅しもおこなわない。
- ・ (ロシアとは)50年代からの関係があるが、ウクライナ侵略があったので関係を変えざるをえない。

カンボジアは国連総会の3回の決議にすべてロシアの侵略非難の意思を表明しました。同時にASEANの包摂性の原則を堅持し、8月のASEAN外相会議、11月のASEAN首脳会議ともロシアの参加を排除せず、ロシアを含めた対話の場を保障しました。ASEAN対話国ではないウクライナを11月のASEAN首脳会議に招待し(ウクライナ外

相が参加)、ウクライナの東南アジア友好協力条約(TAC)加入を後押ししました。

3－ミャンマー問題ではフン・セン首相、プラク・ソコン外相が2021年4月のASEAN首脳会議が採択した5項目のコンセンサスにもとづいてミャンマーを訪問し、ミャンマー問題解決への糸口を見出す努力を続けました。

エピソード3 残された未解決の課題—ミャンマーの人権と民主をどう回復するか

クーデターで逮捕され、裁判で次々に刑期を重ねられているアウンサン・スーチー氏



ミャンマー国軍最高司令官ミン・アウン・フレイン



フン・セン首相はミャンマー軍事政権との会談は持ちましたが、アウンサン・スーチー氏ら不当に逮捕された野党指導者との会見は果たせませんでした。ASEANの中からもこの点で不十分さを指摘されるとカンボジア政府は従来の態度から、より軍事政権へのきびしい態度に転換し、国際世論の批判にもとづく軌道修正をおこないました。ASEAN首脳会議は新たに5項目のコンセンサス実施を期限を設けてミャンマー政権に迫る態度を打ち出しました。しかし、ミャンマー問題の調停は次の議長国インドネシアに引き継がれることになりました。

このほか、この10数年来の懸案となっていた東チモールのASEAN加盟については加盟の前提となる事前審査もおこない、加盟実現へのめどを付けました。

4－私にとっては数えてみると今回のカンボジア訪問は10回目となる記念すべき訪問でした。カンボジアは私が訪問した初めての外国でした。1969年11月、インドシナの中立国カンボジアがアメリカのインドシナ戦争に巻き込まれる直前でした。この最初の

訪問の4カ月後にはロン・ノル将軍がクーデターでシアヌーク国家元首を国外追放し、カンボジアをインドシナ戦争の渦中に引き込みました。ハノイで知り合ったばかりの日本電波ニュース社の柳沢特派員がカンボジア取材に飛び、そのまま行方不明となり、その後、ポル・ポト軍に殺害されたことが明らかになりました。

その後、大虐殺のポル・ポト政権が崩壊し、ヘン・サムリン政権が樹立されましたが、私が2回目のカンボジア訪問を果たしたのは1985年3月でした。戦争で荒れ果てたアンコールワットを訪問したのもこの時が初めてです。この時の取材ではフン・セン首相インタビュー、ポル・ポト政権の虐殺の証言、復興の様子を取材しました。シアヌークの長女のボバ・デヴィ王女のカンボジア舞踊の復活の取り組み、ポル・ポト政権ナンバー2で、後に国連の虐殺裁判の被告となったヌオン・チェアを逃亡の地パイリンで取材しました。ベトナム軍の部分撤退開始の取材では米軍が残した大型輸送ヘリ「チヌーク」でタンソンニュット空港からカンボジア中部山岳地帯のストントレンに飛んだこともありました。

今回のカンボジア訪問で私がもっとも熱い思いで参加したのは、アンコール遺跡群の見学です。アンコール遺跡群は、私の個人的な感慨を乗り越えて、その遺跡群自体の魅力、高い芸術性と彫刻の持つ人間性・社会性の持つ私たちとの親近感によって「人類の芸術造形のすばらしい能力」を見せつけました。古代から中世にかけて花開いた東南アジアの人々の到達した芸術性の高みを見せてくれました。

エピソード4－AALAのカンボジア訪問を歓迎してくれたアンコールの神々（私の訪問は10回目、アンコール遺跡は7回目）

アンコールワット第3回廊にそびえる尖塔



アンコールトム美しい女神像（デバター）



5－今回の訪問にあたっては事前にAALAでの学習会に、在日カンボジア大使館の協

力を要請し、カンボジア大使のオンライン学習会を開催することができました。しかも、カンボジア大使から直接、AALA訪問団のカンボジア訪問を歓迎するとのメッセージをいただきました。これを受けて日本AALA（田中靖宏代表理事）からカンボジア大使館に本国外務省あての訪問団の外務省訪問と署名提出を希望する文書を届け、ぎりぎりの折衝を通じてカンボジア到着の翌日の外務省訪問と署名簿提出が実現しました。カンボジア外務省ASEAN総務局次長が一行を歓迎し、野本団長からの署名簿提出と受け取りの儀式も実現しました。

ASEAN総務局次長は野本団長が冒頭に、ASEAN議長国カンボジアのASEAN外交がたくみで、素晴らしい成果をあげていることを伝え、次長がこの高い評価に感謝し、かつ12000筆の署名簿提出を歓迎して受け取りました。

AALAのカンボジア訪問の計画立案からカンボジア大使の講演、訪問前の大使館を通じての今回の訪問の意図の表明、そして訪問団全員の外務省訪問と署名簿提出、記念撮影とがパーフェクトに実現しました。これは日本AALAの指導部と訪問団、ツアー実施に携わったすべての関係者の団結と努力の結果であると思います。

カンボジア外務省ASEAN総局のチェウン・ソクラ次長は、完璧な英語。洗練された物腰の、若く、才能豊かな外交官でした。ポル・ポト政権の大虐殺、知識人虐殺により「ゼロからの出発」を強いられたカンボジアで国の発展を担う「若き官僚たち」が輩出していることに驚きました。

エピソード5 AALA訪問団はカンボジア外務省でこの間のASEAN議長としてのカンボジアの果たした役割を称え、署名12000筆を提出（テーブル向かい側の右から2人目がチェウン・ソクラASEAN総局次長）



6－ASEAN議長国で恒例となって開催してきたASEAN人民フォーラムに日本AALA代表として田中靖宏代表理事がこれまで何回も参加し、今回もオンライン参加しました。訪問直前のプノンペンと結んだオンライン会議を活用し、「カンボジアの独立メディアセンター（CCIM）」代表とのメール交信が実現しました。カンボジア独立メディアセンター代表から日本AALA訪問団との交流を歓迎することが伝えられ、午前の外務省訪問に続き、同じ日の午後、独立メディアセンターの事務所5階の会議室で交流が実現しました。CCIMの代表の一人、チャー・ソクンテアさんがスライド上映をしながらこの間のCCIMの活動を紹介し、AALA訪問団からの質問にも積極的に答えて、約1時間交流し、その後、贈り物を交換し合い、全員で記念撮影しました。

エピソード6 カンボジア独立メディア・センターと交流(いずれも同センター本部の会議室で)

カンボジア独立メディアを語るチャー・ソクンテアさん(右端)



ソクンテアさんとの交流を喜び、感謝する野本団長



チャーさんのCCIMの活動紹介では、フン・セン首相のASEAN首脳会議の記者会見からCCIMの記者たちの参加が拒否されたことへの抗議声明の紹介をはじめ、全国各地でCCIMのジャーナリストたちが中央・地方の政権幹部の汚職、土地取り上げ問題を取り上げ、報道の自由を要求して政府による報道規制を批判する活動をしていることが紹介されました。CCIMの記者たちに対する脅迫もあり、チャーさん自身が家族の安全のために一時的に国外に避難したことも紹介されました。

以下はCCIMのホームページの活動紹介ですが、プノンペンのベトナム人水上生活者がその居住する家屋や養魚場から追い出されて避難所に閉じ込められている光景をビデオ撮影しようとしたCCIMの記者が撮影を阻止され、記者カードを不当に記録されるなどの妨害を受けたことが紹介されていました。一般のカンボジア人がベトナム人居住者を嫌

っていると言われるなかで、カンボジアの良心的な記者が、弱者として迫害されているベトナム人の基本的人権の擁護を報道しようとしている姿は注目に値します。

カンボジア独立メディアセンターとの交流が開いた今後のASEANとの交流の方向としては、こうしたASEAN各国のNGO、民間・人民レベルの組織との交流がきわめて重要だと思います。現在のASEANの活動の基本的な指針であるASEAN憲章はその目的の1つとして「人民志向のASEAN」、つまり「ASEAN各国の国民に根ざしたASEAN」を発展させる方針を掲げています。日本の国民に根ざした平和・民主組織の一員である私たちとASEAN各国の民間レベル・人民レベルの交流の強化と発展は、ASEANという地域的な政府間組織の活動を「草の根」から支えることになり、ASEANの平和地帯構想の促進をいっそうゆるぎないものにすると考えます。

7—後日、トンレサップ湖内のベトナム人水上生活者の子どもたちの学校を訪問して交流しましたが、ベトナムのカンボジア国境のタイニン省から派遣された教員夫妻が熱心にこの子どもたちの教育にあたっていました。この子どもたちはカンボジアの地で生活し、ベトナム語とカンボジア語を学び、カンボジア人社会の中で交流することになり、今後、両国の国民間の相互理解と友好にとって重要な役割を果たすことが期待されます。

エピソード7—トンレサップ湖の湖上学級訪問—ベトナム人生徒との交流



一般的なカンボジア・インテリ層の「ベトナム人嫌い」は根深いものですが、野本団長があいさつのさい、私にベトナム語の通訳を頼んだことで、そうした雰囲気が変わりました。カンボジア人ガイドがベトナム人への侮蔑的な態度をひっこめたのです。ベトナムの子どもたちにはカンボジアへの偏見はありませんでした。

8ー上のことに関連して私は2005年12月にアンコールワットで開催されたアジア子ども文化祭典のことを思い出しました。このアジア子ども文化祭典には日本を含むアジア7カ国が参加していました。日本からは新潟地震で被害を受けたばかりの新潟県の十日市町の太鼓隊の少年少女が参加しました。私の採点では、各国の子どもたちの出し物の出来栄は、カンボジアの王朝舞踊が抜群でしたが、カンボジアの子どもたちの感想を聞いてみると答えは意外なものでした。カンボジアの舞踊団の子どもたちは「ベトナムの踊りが一番良かった」と口をそろえて、ベトナムの子どもたちの踊りをほめたのです。カンボジアの大人たちのベトナムへの憎しみに近い感情からは、とても想像できない子どもたちの偏見のない見方に私は驚き、かつ感動しました。

エピソード8ー2005年12月にはアンコールワット東塔門の特設舞台でアジア子ども文化祭典(新潟の十日市町の太鼓隊も参加)

昼間、練習にいそしむカンボジアの子どもたち



ベトナムの少女たちの舞



9ーカンボジアの国民と国土に刻まれた深い傷

カンボジアに刻まれた深い傷の第一は、ポル・ポト政権による約200万人にのぼるとされる大虐殺の傷痕です。「キリング・フィールド」と言われるプノンペン郊外チュンエックの虐殺博物館とプノンペン市内のトゥルスレン収容所博物館は訪れるカンボジア国民にとっても、外国人にとっても為政者による自国民虐殺の動かぬ証拠であり、それが諸大国による侵略と戦争がもたらした結果であることを示す証拠でもあります。

エピソード9 カンボジアが負った深い傷①—トゥルスレン収容所で処刑された人々の写真



ベトナムとカンボジアの外交関係があった1977年の年央、当時、ハノイに駐在していた「赤旗」記者であった私はハノイ駐在の「民主カンボジア」（ポル・ポト政権）のソク・ケアン大使を取材したことがあります。農民を強制動員した大水利工事や貨幣の廃止などポル・ポト政権の無謀で、非科学的な施策を「素晴らしい」と賛美する、ポル・ポト政権に忠実な外交官でした。しかし、この年12月31日にポル・ポト政権がベトナムとの外交関係断絶したため、ソク・ケアン大使は本国に帰国しました。後に私は読売新聞記者の小倉貞男氏の著書『インドシナの元年』（大月書店出版）でソク・ケアン元大使（38歳）がトゥルスレンで1978年3月25日に処刑されたことを知りました。トゥルスレンには処刑された人々の写真が当時のまま壁に張り出されています。今回はソク・ケアン大使の顔写真を確認できませんでした。ぜひ次の機会にトゥルスレンで彼の写真を確認することを私の責務としたいと思います。虐殺された人を数字ではなく、実在した人物として、思いだし、記憶にとどめることが生き残った私たちの共通の責務であると考えます。

10—もう1つの傷痕は、カンボジアの全土に及ぶ地雷と不発弾の地雷原・不発弾の存在です。フランス、アメリカの侵略戦争、その後のポル・ポト政権との内戦、この内戦への国際介入が招いた、いまだに広大な地域に残る地雷原と不発弾の数々は、日夜、カンボジアの人々を殺傷しています。とりわけ野外で耕作する農民や、野外で遊び、行動する子ども

もたちを殺傷しています。対人殺傷地雷の製造禁止条約（オタワ条約、批准国150か国）がすでに締結されていますが、米露中などの諸大国はこの条約に参加していません。これら諸大国は核兵器保有をやめようとしませんが、同じ理由で地雷製造禁止条約にも背を向けているのです。カンボジアの地雷除去センターで、カンボジアのいたるところに埋められている地雷と不発弾の実態を知ることができました。大きなクラスター爆弾がさく裂する模型の展示がありました。

エピソード10 地雷除去センターからの警告

カンボジア全土の地雷・不発弾の所在を示す地図



地雷未処理・棄権の告知



11ーカンボジアのすぐれた歴史・文化遺産

今回のツアーの目玉の1つは「アンコール遺跡」を丸一日かけて見学したことです。アンコール遺跡群はカンボジア国民が誇りとする、カンボジアが世界史に記録したすぐれたカンボジアの国民的な文化遺産です。とりわけ豊かな自然の恵み、わけてもアジアの特色である高温多湿の気候を条件とした「稲作文化」がアジアの古代～中世の歴史区分の中で素晴らしい発展を遂げ、開花したカンボジア文化の粋（すい）であり、アジアの文化の粋とも言える、アジアが誇る歴史遺産であると思います。

東南アジアの古代史では各地の王朝がさまざまな形で交流し、互いに学び合い、各地の王朝と王朝治下の農業や文化を発展させました。アンコール王朝を開いたジャヤヴァルマン2世はジャワ（インドネシア）から帰還して、アンコール王朝を創設したとされています。

す。アンコールの遺跡群は、カンボジア民族のすぐれた遺産であると同時に、東南アジアの当時の文化と技術の粋を集めた貴重な歴史資産でもあります。

とりわけこの地の広大な面積にわたる稲作用灌漑設備の拡充と稲作の収量の飛躍的な発展が、アンコール遺跡の壮大で、緻密で、美しいすばらしい芸術作品をつくりあげる土台となったと思います。とりわけ注目すべきは、稲作文化が育んだ、稲作のための農民たちの緻密な協力と灌漑技術の発展です。領土を奪い合うのではなく、生産のための協力と技術の向上によって発展した東南アジアの平和と協力を中心とする社会の特徴です。この社会的特徴が東南アジアの平和のための協力の土台になっていると考えても良いかと思います。

ここで私が強調したいのは、アンコール遺跡が古代の人類の文化水準の高さを示し、とりわけアジアのすばらしい「地域的遺産である」ということです。カンボジアの古代王朝の到達したすぐれた文化的業績に尊敬の念をもちつつ、東南アジア、アジア、世界という広がりをもった地球的な文化遺産であるという、共通の視点を持つことが重要だと思います。

2006年のアンコールトム取材の際、とっぷりと暮れたアンコールトムをライトアップして、舞台の上であいさつするカンボジア王朝舞踊団の姿を見かけました。

エピソード11—アンコール・トムでも華麗なカンボジア舞踊(2005年12月、ASEAN社会・文化共同体ツアーを迎えて)



偶然、使節団の中に見つけた旧知のベトナム・ホーチミン市文化局のニムさん（後に東京

のベトナム日本大使館参事官)の言葉が印象的でした。「やがて発足するASEAN社会・文化共同体に向けて、東南アジア各国の文化の中に共通のアイデンティティーを見つけ育てていくのがこのツアー開催の目的だ」と語りました。

東南アジアでASEAN共同体を育て、共通の文化を育てようとする強い意思を感じました。先に紹介した子どもたちの偏見のない素直な考え方と相まって、東南アジアに友情と連帯の新たな感情が培われているのを実感しました。□

12ー今回のカンボジア・ツアーの成果について

今回のASEAN議長国カンボジア訪問ツアーはきわめて大きな意義があったと思います。とりわけASEANの平和地帯構想の一角を占める、私たち日本の平和・友好組織である日本AALAからASEANに差し伸べた連帯の意思がしっかりと届き、連帯の絆を確かめ合うことができました。それはASEANと各国政府のつながりというより、ASEANという政府間組織とそれを支持するアジアの諸国民の絆というべきものです。

「戦争するな、どの国も」署名がASEAN議長国に公式に届いたことは今後のASEANの平和の枠組み作りに、ASEAN域外諸国からも今後、働き掛けることを可能にし、ASEANの取り組みを強く後押しすることを可能にします。

今回のカンボジア・ツアーに続き、これからもASEAN議長国への訪問と署名簿提出、そして、政府間の取り組みに加えてNGOなど民間レベルの取り組みで重層的に「平和の枠組みづくり」を続ける意思を私たち日本AALAと日本のすべての平和組織の共通の決意として確認し合いたいと思います。□